

ライオンズクラブメン
バー

(三重県 林 英夫)

永恨の爪跡シベリア抑留の四カ年

滋賀県 重田良三

一 私の軍歴

昭和十八(一九四三)年八月 徴兵検査第一乙

種合格

昭和十九年一月十日 福井県丹生郡立待村中部

三十六部隊入隊

昭和十九年二月 ソ連国境近い満州国密山

迫撃砲大隊に転属 一期

の検閲終了後、隊長の奨
めで憲兵の試験を受け採
用され、十九年三月、新
京にある関東憲兵教習隊
に入隊。六カ月の教育終
了、任憲兵兵長

昭和十九年十一月

満州奉天城内憲兵隊に配
属、満州人の住む奉天城

内に勤務

昭和二十年三月

憲兵隊が関東軍特別警備

隊に名称変更になる

昭和二十年八月

終戦、武装解除、解散

二 ソ連侵攻までの関東軍、満州の状況

その後南方戦線の戦火は拡大し、関東軍の主力は動員され、その補充に満州にある邦人十五万人が現地召集を受けて、その兵力は七十万人と言われていました。

三 ソ連侵攻、終戦武装解除

折からソ連は昭和十六年四月から五カ年間有効の日ソ中立条約を一方的に破棄し、昭和二十年五月、独ソ戦でドイツが崩壊した後は兵力をほとんどソ満国境に集結し、その兵力は実に百七十万人と言われていました。折しも昭和二十年八月九日、広島に原子爆弾が投下されたその日、ソ満国境全体に侵攻してきました。

「追伸、戦争中満州は空襲も一回(アメリカ側、重慶から)きりで、物資も豊富だったので、抑留

者を送る前にほとんどの物資をソ連本土に運び去りました」

侵攻後一週間、一方的な戦いに本土から孤立した百五十五万人の在留邦人と七十万人の関東軍將兵は、無謀なるソ連の行動下にさらされ、昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅により軍隊は武装解除され、無念の涙をのんだのでした。私は勤務が満州では国境遠くの南方の奉天(瀋陽)でしたので侵攻後も直接戦火を交える事もなく、関東軍特別警備隊として特別な任務中、命令により武装解除を受けました。

四 終戦後奉天の混乱

そのころは既に奉天の治安は乱れ、数日後南下して来たソ連軍に加え、中国毛沢東派の八路軍(共產系)と、蒋介石派の国民党軍と、一部中国人の不穏分子による暴動、掠奪、放火、婦女子暴行等の、まさにこの世の生き地獄の様相でした。特に満蒙開拓義勇軍の妻達が顔に鍋墨を塗り、頭は断髪丸坊主にし、幼い児を背に泣き叫ぶ姿が今も眼

の前にちらつきます。

五 スターリンの策謀

終戦後、いち早くスターリンは日本の降伏条件として北方領土と北海道の留萌と釧路を結ぶ線（北海道の北半分）をソ連の占領地域に加える要求が、北方領土と樺太という事になり。北海道についてはトルーマンの反対に合い、その見返りとして一転して日本軍のシベリア抑留の命令を極東軍司令官に出したのです。結果、残留した将兵の大部分と、その他一般邦人を含む約五十七万五千人が抑留の運命となりました。

六 私の奉天での行動、逮捕入ソまで

奉天に侵攻して来たソ連軍は中国人を利用して懸賞金付きで元日本軍の憲兵、満州国の高官探しに躍起となっておりました。私は憲兵隊勤務当時、親しくして頂いた熊本県出身の上田さん宅に仮名の住民票をとり、密かに内地引き揚げの機会を待っておりましたが、巷では蒋介石派の国民党軍が元日本軍人を傭兵として集めている事を聞き、某

日散らばった元同僚と連絡をとり、ある喫茶店の二階で密議中をソ連兵に踏み込まれ、奉天の第二監獄に收容されました。同僚とは別々に拷問と厳しい取り調べを受けた結果、ソ連に対しては敵性派の蒋介石の国民党軍に参加を企てた罪状ありとして、前憲兵の身分は分からぬまま同僚と離して、逮捕されました。約三日後、先に武装解除されて拉致された元軍人の一部と満州国元警察官、上級官吏、日本軍憲兵（身分の判明したもの）それに満州ゴロと称する暴力団系の邦人で編成された約二千人の拉致部隊に編成され、昭和二十一年一月十二日、ソ連送りの車上の人となりました。

七 満州を北上、国境を越えチタの收容所へ

その後、列車は満州里を越えソ連領へ、車中は一車両の中心にストーブを置き、バリケードで仕切られた両側に三十人あてぐらい六十人ほど、後の者の膝の上に前の者の尻を置き、自由に動けない様（逃亡防止のため）両便の際には、手を挙げて監視兵の指示により車両の両側片隅にあるビー

ルの空樽に用を足しました。途中不規則な停車を重ね、二日後到着した所は国境の町満州里から約四百キロのチタの駅。貨車より下ろされ、レンガ作りの収容所らしい幾棟もの建物に分散、監禁されました。

八 目的地カラガンダへ

監禁二カ月（この理由は不明）、これでやっと解放された。祖国へ帰れる……勝手な判断でした。再びチタの駅から貨車に乗せられ西へ西へ。凍結した白々と光るバイカル湖を過ぎたころには騙され続け帰国の望みは絶望のどん底となりました。更に走り続けた七日間、ナホトカから八千キロ、異国の丘の歌「海山千里と云うけれど」まさに二千里、中国チベット高原の裏側にあたる中央アジア、カザフ共和国カラガンダの目的地に降ろされました。時に昭和二十一年三月の終りごろ、春程遠い酷寒のシベリアでした。途中一日二回ぐらい何も入っていない塩気だけのスープ一杯と黒パン一片の食事のため、立ち上る気力も体力もなく小

便にも血が混り疲労の極限でした。

九 収容所、労働作業の状態（全般的）

私達収容所の近辺内部

六十万人の抑留者は広大なシベリアの荒野に作られた千五百カ所余りの収容所に分散されました。この労働内容は、鉄道の敷設、採炭、建築資材の掘り出し（碎石）、木材伐採、ナホトカ、ウラジオ港湾建設、水道工事などが主なものでした。特にスターリンが最優先したバム鉄道は計画よりも二カ月も早く、昭和二十四年の十一月に開通され、これは枕木一本ごとに一人の日本人抑留者の亡きながら眠っていると云われるほど苛烈な突貫工事であったと云われています。収容所の規模は労働の種類条件等により、その収容所人員は小さきさまでず。私達二千人の部隊は七百人ほどの作業部隊に分散されました。収容所の周辺には望楼があり（四隅）、周辺全体には有刺鉄線が張られ、自動小銃を肩に見守り、逃亡の防止に眼を光らせています。建物は半地下で、土壁、土屋根。

一棟に百人ほど入れられ、真ん中にペーチカがあり、二重窓で室内は暖かく、片側五十人あて、上下二段の粗末な板張りの寝台が作業に疲れ果てた身体を横たえ、友と語る故郷の話、各々のうまい食べ物の話。その作り方等、唯一の憩いの場と時間でした。(唯一の楽しみは食べる事と寝る事)

十 従事した作業全般の状態

このカラガンダ地区は、ソ連でも屈指の炭鉱地帯でしたが、私達は抑留期間を通じて炭鉱作業に一度も従事しませんでした。建築の基礎に使う様な採砂、碎石(ハツパ)をかけて山を砕く)、水道敷設のための壕掘り作業は幅六メートル、深さ三メートルの壕を、つるはしとスコップの手作業です。酷寒零下三〇度のシベリアは一面の雪と凍土です。収容所の衛門の入り口に吊るしてある鐘(鉄道のレールの切り端三十センチぐらいのもの。私達は地獄の金と呼んでいました)が、寒暖計が零下三〇度を一度でも上ると集合の合図で現場に出発です。降り積もった雪の下の凍土はツルハシも寄せ

付けません。それでも監督、監視兵は容赦なく作業に追い立てます。ふと相手の顔を見ると鼻の先がまっ白、恐ろしい凍傷です。「おいお前、鼻の先が白いぞ」相手は自分には分りませんのでお互いが注意、自分が注意されて始めて一心に鼻をこすります。ようやく元に戻り、また作業。待ちに待った昼食は朝食に支給になった黒パン三五〇グラムと炊事から運んで来る粟、稗、高粱等を塩味に食用油を混ぜた、眼の映るようなスープを食器に一杯。休む間もなく午後の作業。夕刻、作業を終り人員点呼。これがまた大変。程度の低い監視兵は数の勘定も充分出来ず、五人ずつの縦隊に五、十、十五と並ばせ、それでもなかなか勘定が合わず、寒い現場に立たされました。

十一 作業中での特に悔しい思い出

頭書述べた通り、私達部隊の仲間は一部の民間人の満州ゴロ(ヤクザ親分、子分の集団)がソ連側に取り入り、衣食を欲しいままにし、蓄えた体力をかさに現場ではろくに作業もせず、一般の

我々には作業の状態が悪い等と暴力をふるい、同胞でありながら余りに血も涙もない仕打ちにはソ連側にも増して悔しく切ない思いをしました。

十二 シベリアの気象、気候

シベリアには四季がない、冬と夏だけです。じやが芋、トマトが主なシベリアの野菜です。トマトは赤く熟するまでに寒さで枯れるので青いのを採って塩漬け。じやが芋は主食、トマトが唯一の副食です。四月ごろまでは雪と酷寒の季節。五月に入り一斉に草が萌え、花が咲く。六月、七月は抑留者の我々には恵まれた季節です。八月も終りに近付くと雪が降り出し、内地では想像も出来ません。

十三 衣類、気候、補修取替等に対する対応

夏は日本軍のシャツ、袴下、ズボン（何れも関東軍使用のもの）。靴下はなく、布切れを巻く。冬は前記の外にソ連民間人の綿入れの上着とズボン、毛皮の外套（作業時でも上着と外套はつけたままでない）と寒さに耐えられない。補修は自分で行っ

た。針と糸とはんば布、衣服の取替は一切なし。

十四 身体管理

月に一回衣服を消毒（熱風）し、虱、南京虫等殺虫、殺菌。その間に陰毛を全部剃らす（男として情ないやら、口惜しいやら）。室内で洗面器一杯の水と粗末な石けんで顔と身体を洗う。

十五 食事の質量、抑留期間中の変化

朝食時三五〇グラムの黒パン一片を受領する、味は粗雑。薄い粟か稗のスープ。昼は作業現場に収容所の炊事から少し濃い目のスープが届く。スープの量はニューム食器に一杯、三五〇グラムのパンを食い延ばして食べる。夕食は食堂で、たまには豚肉等が入った濃い目のスープ。抑留期間中食事の変化はほとんど無かった。ただ、メーデー、革命記念日等は作業は休みで、魚や肉等も副食には沢山あったが、腹を満たすには至らなかった。

十六 休養、休日、体調検診、診療等

前記の休養休日には、それぞれのお家芸、グループの演芸も飛び出し、日ごろの疲れを癒してく

れた。月に一回女軍医による身体検査。診断は下着なしの丸裸、恥も外聞もない。聴診器なし、女医の前に並び、背中を向けて女医が尻の肉を手でつまんで肉の張り具合を見て、等級をつける。身体が衰弱している時は皮だけ引つ張れて肉がつかめない。その状態を見て等級をつける。一、二級は屋外作業、三級は所内や軽作業、四級は屋内作業、若しくは炊事勤務等。とりわけ熱病に対する警戒心は強く、三七・五度以上あると休養室に入れ、米の飯、肉、油等で栄養をとる。反面仮病に厳しく（例えば体温計をこすって体温を上げる）、発覚すれば営倉入りである。極端な例として二級から四級になり炊事勤務でブクブク太って二級の重作業をしてまた痩せて、四級で炊事勤務、太って二級、重作業で四級炊事勤務。こんな繰返しをする者もあった。私は抑留期間中二級の連続であった。

十七 民主運動、共産主義の思想教育

入ソ二年目よりマルクス・レーニン主義の日本

語版の単行本を一冊与えられ、作業で疲れた身体を就寝前の約一時間、仲間から選ばれて講習を受けた活動分子の抗議を絶対的に受けさせられた。ハバロフスクで発刊された日本新聞が民主教育の資料となり、内地の情報も嘘か真実かこれを信ずるより外なかつた。

十八 抑留三年目から帰還まで

昭和二十三年に入り、周辺の収容所からは内地帰還、ダモイの噂が流れてきた。このころから内地への便りを許されたが私は仮名のまま、はたと困惑した。果たしてこの便りが内地へ届いて家族達の驚きを想像した。しかし一カ月後まぎれもない父の筆跡で返信があつた。家内一同元氣である、一日も早い帰還を待っているとの事。肝心の長兄の事は何も書いていない。私は南方へ行つた長兄の消息が気がかりであつた。（次兄は昭和十九年三月八日、南方へ向う輸送船と共に太平洋で散華した。この事は北満密山の原隊当時知らされた）

あの筆達者な長兄の事故、元氣で還っていたら父

に書かさず、自分が書いてくれるだろう。若しかしたら……私は不吉な予感に襲われた。内地に還つてから父に聞かされた事であるが、仮名の便りを受取つて困惑。私は終戦時消息不明になっていた。若しかしたら満州にいた弟ではないかと、当時コックリさんと云う占いを立てたり、今の老人会長の父でエスペラントでロシア文字を知つておられると云う事で尋ねたら、これはソ連のカラガンダと云う所の収容所からのもので、不明の弟さんに違いないと言われ、返信をしたという事でした。

昭和二十四年騙され続けた帰還の日が来ました。極寒と飢餓と栄養失調、六万人に近い同胞が恨を残して異国の地に果てた。それなのに私は今帰還の日を迎えた。シベリア抑留四カ年。余り丈夫でなかつた私がこの日を迎えることが出来たのは戦死した二人の兄の魂が、お前だけは何としても還つてくれと守つていてくれたと感無量です。

十九 引揚のため入所したナホトカの収容所

カラガンダより帰還のためナホトカに到着。引揚船を待つ間に、誰からともなく仲間に仮名の者がいるとソ連側に密告され、奉天当時の取調べのごとく拷問を受け、仮名の理由を酷く追及され、初めて憲兵の前身を申し述べました。勤務の状態で経理関係でソ連に敵対行為はなかつたことで許され、四年振りに初めて本名に戻りました。しかし我々に対する警戒の眼は厳しく、防諜に気を配り、衣服の縫い目までもほぐし、記録したものは一切破棄させられました。

引揚船に乗るナホトカの第三収容所で乗船名簿の読み上げ「シゲタリヨウゾウ」「シゲタリヨウゾウ」。はっと我に返りました。タラップを踏みしめる足もガタガタふるえ、夢か真実か、昭和二十四年最後の引揚船、信洋丸の甲板に立ちました。

二十 引揚船信洋丸の船中にて

四カ年の抑留生活は思想教育も厳しく、船中二千人の引揚者の中で思想教育に感化された赤旗組と徹底した反動組が対立し、船長の制止も聞かず

船内闘争が起こりました。私は日の丸組の一人として静観し、内地出發以来六年振り故国の土を踏みました。アカハタ組は入港後も天皇島敵前上陸だと叫んで三日間上陸を拒否しました。

二十一 引揚援護局にて

舞鶴上陸後、早速長兄の事が心から離れず、まづ引揚援護局の滋賀県関係を尋ねた結果、南方戦線の帰還はポツダム宣言によりほとんどの将兵は昭和二十一年中に終わっていると言う事で、昭和十九年三月次兄の戦死より一年後の二十年三月、長兄の死を確認しました。

二十二 援護局から故郷帰還まで

日の丸組の私達半数の千人はスムーズに帰還手続を終り、滞在一週間、昭和二十四年十二月七日舞鶴駅を出發、京都駅頭に到着。多勢の出迎人中にふと眼にしたのは「歓迎 重田良三君」と書いた一メートル余りの幟でした。持っておられたのは紛れもなく大谷吉一さん。現役入隊以来六カ年、親達との面会も出来ず出立した私が初めて見

た故郷の人。大谷さんを見上げる眼は嬉しさと感激の涙でいっぱいでした。大谷さんは役場に勤務しておられて、その代表として来て頂いたのです。大谷さんからは長い間の苦勞のねぎらいと、抑留四カ年の思想教育により洗脳されていないかと警察よりの配慮を聞かされ、私は日の丸組で引き揚げた事をお話し、深川駅までの車中はよもやま話の語りいで尽きませんでした。以上で私の四カ年の抑留記を終わりたいと思います。

【執筆者の紹介】

一 入隊まで

大正十二年三月三十日 滋賀県甲賀郡甲南町寺庄 父甚五郎、母志づの五男として出生

最長兄、姉は生後間もなく死亡、兄二人は戦死

昭和十二年三月 寺庄尋常高等小学校卒業

昭和十二年四月 埼玉県秩父町 矢尾合名会社

入社

昭和十八年八月 徴兵検査第一乙種合格

昭和十九年一月 現役入隊

生家は祖父の代より稲作の外、茶園二反余りを栽培し、一番茶は茶摘子による手摘みで、自家の作業場にて、茶師により手もみ茶を仕上げ、重田園の暖簾により自家販売していた。

二 帰還後

昭和二十四年十二月 家業を継ぐ

現在は河川改修の敷地として、茶園のほとんどが買収され、仕入茶のみにて兼業として営業を続けている。

昭和二十九年二月 甲南町農協に就職

昭和五十五年三月 定年により退職

昭和五十七年四月 甲南町土地改良課に嘱託として就職

平成四年三月 退職

公職、名誉職

昭和四十八年～六十年 菩提寺総代四期十二年

昭和五十二年～六十四年 甲南町民生委員四期

十二年

昭和六十年九月～平成二年三月 寺庄公民館建築委員副委員長

昭和六十二年四月～六十三年三月 大字寺庄区长

平成四年四月～平成四年三月 甲南町選挙管理委員

平成六年六月～平成九年五月 甲賀郡農協監事

平成八年十一月～平成十年十月 菩提寺本堂建築委員

平成十四年四月～平成十六年三月 甲南町シル

バー人材センター理事

平成十四年四月～平成十七年三月 甲南町グラ

ンドゴルフ協会理事

(滋賀県 林 憲一)